

平成十五年十二月号

「心光寺からの便り」

【※今月は十六日の会はお休みです】

■大石法夫先生が急に入院されることになりました。今月はそのお知らせから書き始めなければなりません。実は大石先生は、今年五月頃からのどに痛みを感じておられたのです。食べ物を飲み込む時もお話をされる時も、痛みが走るようになっていたのです。しかし先生はそれを誰にも、家族の方にも話されなかったのです。

当時大石先生は一箇月の内で、自宅での法座三回、県外への法座の旅六〜七回、合計九〜十回の法座を毎月こなしておられました。今年五月といえば、この定例の法座以外にも、北海道での二泊三日の法座の旅が加わった月です。さらに翌六月には、当院で二泊三日の念仏同朋研修会が行われています。このような過密な日程は、三十代、四十代の働き盛り



の肉体でも、一箇月も続かないでしょう。

このような過密な日程の渦中にあつて、大石先生は、のどの痛みを一言も口にされませんでした。ご自身の奥にしまいこんで、黙って各地に足を運ばれ、ご本願の世界を静かにお話しくださいました。

その後九月二十日の京都での法座の席で、はじめてその痛みについて皆さんの前で話されました。五月以来のどに痛みが続いていること、その痛みは治まるどころか日を追って強くなること、首の付け根の辺りが腫れて触ると痛いこと、近々大きな病院で検査を受ける予定であること等を、京都の法座のお参りの皆さんの前でお話しされたのです。

大石先生がそれを公表されたということは、よほどの事、先生ご自身も、これ

はただごとではないと覚悟を決められた上でのことではなかったかと思えます。私どもも固唾^{かたず}を呑む思いで検査結果を待ちました。

ところが予想に反して、検査結果は「どこにも異常なし。癌の血液検査も正常」とのことでした。その結果を聞いて、私どもは一応安堵しました。けれどもそれなら、のどの痛みはなぜ続くのか。その原因は依然不明のままです。その不安が去ったわけではありません。ただ、信頼の置ける病院で詳しく検査した結果が、上記の通りです。従って痛みの原因は不明だとしても、致命傷となるような原因ではないのかもしれない。そのように都合よく解釈して、私は引き続いて先生にご出講をお願いしてきましたのです。

このようにして去る十一月十五、十六日、当院での御正忌報恩講も大石先生のご法話によって勤めさせていただきました。けれどもその頃の大石先生は、ひどくお疲れでした。ご法話の際は生き生きとした表情でお話されますが、ご法話の前などは、お部屋の炬燵の中でじっと横になって休んでおられました。

十一月二十六日、前回とは別の大きな病院（広島大学病）で再び検査を受けられました。そして十一月二十八日、その検査結果が出たのです。口腔底癌！十二月一日、今後の治療計画についての詳しい説明があつたそうです。十二月十一日に入院とのことです。

十二月五日、大石先生からお便りをいただきました。主治医のお話では、手術は五〜六時間に及ぶ大手術。その後の入院期間も五〜六ヶ月の長期間になるとのことです。そんなにも進行していたのです。

今考えれば、今年の三月十六、十七日、私の住職継職法要にご出講くださいました。その直前の三月十二日、ご自宅での法座の後、風呂から出られたところまで倒れられるという出来事がありました。そのことについては、『心光寺からの便り』四月号で触れさせていただいています。実はそのころから、そのようなかたちで前兆が出ていたのです。今頃になって気付くようなことです。その頃から先月末まで、癌をかかえた身の大石先生に、どれほどご苦勞をおかけしてきたことでしょうか。

「私たちは法蔵菩薩のお頭^{ひたま}の上を、土足で平気な顔をして立っているの

で

す。法蔵菩薩はそのことに一言も文句を言わず、黙って私たちを支え続けておられるのです」

このような意味のお言葉を、曾我量深先生が何かの本で述べておられました。その言葉を今思い出しています。

まさに大石先生は癌に蝕まれながら、全身を燃焼し尽すようにして、私どもを支え続けてくださったのです。にもかかわらず、私はそのことに一向気付くこともなく、平気な顔をして安易にお話を聞いてきたのです。これはまさに法蔵菩薩のお頭の上を、平気な顔をして立っている私の姿。またそのことを知りながら、怒らずに黙って支え続けられる、法蔵菩薩の生きたお姿を見せていただくような思いがしています。

■ 以上のようなわけで、今月から当分の間、大石先生には心光寺においていただくことがかなわぬこととなりました。そのことが確かなこととなって、さて心光寺定例聞法会をこれからどうするか。大石先生が入院されると知った時から、そのことについていろいろと考えてきました。実はその知らせを受けるまでは、「心光寺からの便り」を別な内容で書き始めていたところでした。今はそれどころではなくなりました。

十二月五日になって、ようやく私の腹が決まりました。そこで翌六日、大石先生に私の気持ちを手紙に書かせていただきました。それは次のようなものです。

『(前略) 先生のこの度の長期間のご入院の一報は、私どもにとりましてほんとうに大きな衝撃でありました。けれども如来様はすべて善きようにしてくださるといふ所に帰らせていただきますと、この度のことも、如来様はその出来事を通して、多くのことを私どもに教えようとしておられるにちがいないと思inaおしています。』

私はこの度のことを通して、先生がいかに身を粉にし、骨を砕いて、私どものために足を運ばれ、身を燃やし尽してご苦労くださったか。にもかかわらず、そ

のことを当たり前のような顔をして、平然と受けてきたか。そういう私の姿を見せていただく思いがしています。先生のどの奥に出来た癌は、私の為に黙ってご精進くださる先生の、そのような長年の〈ご身労〉の具体的な顕れだと思われるてならず、申し訳ない気持ちで一杯です。その癌が、何だか法蔵菩薩のご苦勞の姿と重なって、手を合わせたいような気持ちになります。先生が心光寺に毎月おいでくださるようになって、先月で二年と九ヶ月。毎月十六日を中心にして夢中で走ってまいりました。その間先生から、どれほど多くのものをこの身に受けてきたかわかりません。ところが今月から、最短でも半年間、先生を心光寺にお迎えすることがかなわぬこととなりました。そのことが確実となって、さて私はどうしたらよいか。

村上道場(大牟田市)や中臣さん(高岡市)、森さん(三重県河芸町)のお寺では、形を変えて定例法座を続けていかれるということを聞きました。家内は、心光寺でも続けていこうよと言います。私も色々とは心は揺れ動きました。その中ではつきりさせていただいたことは、今までのいかに先生に甘えていたかということでした。毎月十六日に先生がおいでくださる。だから私はその日を生活の中心に置いて、毎月の営みはその日の準備のために邁進できました。十六日に本物がおいでくださるので、私は安心して、心おきなく、その日の準備に邁進することができていたのです。今回の事態を通して、そのことをはつきりと教えていただきました。

それと同時に、そのようにして先生が身をもって教えてくださったことを、私はどれ程受け止めてきただろうかということを考えさせられました。忙しさの中で、十分に受け止める余裕もないままに、がむしやりに突っ走ってきたのではないだろうか。

今回このようなかたちで、少なくとも半年間、先生においでいただけないととなったのは本当に残念なことです。しかしその半年間を、今まで先生が全身を燃やしながらかどもに教えてくださったことを、私の中でもう一度しっかりと確かめ、いただきたいとおす。そのための時間とさせていただけよう。そのように今は気付かせていただきました。

私も来年三月で仕事を辞めます。四月中は身辺整理等に充て、五月からは新しい仕事に踏み出します。新しい仕事といっても、心光寺を場として、(門徒さん、お同行さん、そして家族と共に、生活を通して、先生が身をもって教えてくださった本願の教えを聞かせていただく。生き抜かせていただくということです。先生の教えを受けた者の一人として、「たとえ力は足らずとも」報謝の歩みを始めさせていただくということです。その中心の柱として、五月からまた定例聞法会を再開させていただこう。それまでは敢えて自己に沈潜し、自分を静かに見つめなおす期間とさせていただこう。ようやくそのように決着することができました。

「心光寺からの便り」につきましては、今までのように案内状を兼ねて毎月発行するというかたちは先月をもって終わりとし、今後は、私の中に湧いてくるものが生まれた時に書かせていただこう。そのように思っております。

(中略)

先生には、これから生死をかけての大手術、そして長期間の入院と、大きな試練に突入されるわけですが、どうか手術が無事に終わって、再び元気なお体となって、私どものためにご本願の教えを、特に今回の出来事を通してのご本願の新しい味わいをお聞かせくださいますことを、切に切に念じております。ほんとうにお疲れでございました。有難うございました』

以上です。私の今後のことについては、この手紙の中にすべて書かせていただきました。このようなわけで、心光寺定例聞法会は来年四月までお休みとさせていただきます。五月には再開いたしますので、そのときはどうかまたお参りくださいますようお願いいたします。

■ところで、この手紙の中で、来年三月をもって仕事を辞めるということを書いています。このことは心光寺住職としてのこれからのあり方にも関わってきます。また私が本願の教えにどのように生きていこうとしているのか。そのことに関わる出来事でもあります。それでこのことについては、いずれ「心光寺から

の便り」の中で書かせていただくと思っていました。けれどもこのような事態となりましたので、今月号で書かせていただくと思います。

大分市役所では定年退職の年齢は六十歳です。けれども五十歳を過ぎると「定年前早期退職制度」というのがあります。つまりは「肩たたき」です。その申し出の締め切り日は毎年八月三十一日となっています。実は今年の四月以来、私はその申し込みをするかどうか、ずっと考えてきました。理由は、まだ余力のある内に、残された人生を、大石先生の教えてくださる本願念仏の教えを聞きぬくこと、生きぬくことに注いで終わりたい。私の年齢や大石先生の年齢を考えれば、その時期は先伸ばしにはできないというものでした。

定年までは後七年あります。しかし私にはその七年が実に貴重です。明日がわからぬ命ですから、定年後まで生きているという保証はどこにもありません。同級生で既に亡くなった人は何人もいます。二十代、三十代の頃を振り返れば、ついこの間のような気がします。ということはこれからの十年、二十年もあつという間に過ぎるということです。だからこそ残された限りある人生をうかうかと過ごしたくない。そのためなら死んでいける、そういうものに力を注いで、最後を終えたい。そんな気持ちでした。

けれども辞めれば生活の心配があります。どうするか。心は揺れます。家内はいいよと言ってくれました。それはどれほど心強かったかしれません。けれども一家の生計の責任を考えると、決断はなかなかつきません。その内に八月三十一日が近づいてきます。

そのとき気付きました。これはいくら考えても決断はつかないと。決断がつくまで待つというのであれば、おそらく定年まで辞めることはないでしょう。それに、そうすることは、結局は自分の思慮分別に立場を置いているということになります。その思慮分別の思案こそ、今まで私を流転させてきた自力の迷心ではなかったか。その思案がなければ生きていけないように私は思っています。けれども実際は、私の命はそんなもので一瞬も生きてはいません。私の思議をはるかに超えた大きなはたらきに乗托じょうたく（全身を任せること）して、私の

命は生きています。

その大きなものは、私の思案にとつては、未知の世界です。予測を超えた世界です。けれどもその未知の世界こそ、実際に私を生かしている世界、切れば血の出る生きた世界です。

「私の思案に立つのではなく、その生きた世界に帰ろう。そこに乗托して、念々に未知の世界に生かさせてもらおう」

こうして私は、決断はつかないままに、辞表を提出させてもらうことにしたのです。

以下は、辞表を提出した日の日記です。

〇 〇 〇 〇

(平成一五年八月二十六日)

今日「定年前早期退職願」を局長に提出した。その後部長の事情聴取があり、正式に受理された。

これでもう後戻りはできない。大石先生がよく、「人生岐路に立つ」という孔子の言葉をお話くださるが、まさに今日は人生の岐路に立つて、一方に大きく足を踏み出したのだ。もうこの道を進むしかない。後戻りはできない。湯平駅を降りると信が迎えに来ていた。車の中で、今日正式に退職願いを提出したことを伝えた。

「清水の舞台から飛び降りた気分や」

「大石先生が教職を辞めて豆腐売りを始められた時のことを思うな」

帰宅するとすぐに本堂で夕時勤行。如来様にご報告するつもりで勤行した。

お正信偈を唱げ、それに続く念仏讃の箇所で、念仏は如来の勅命に他ならぬことを改めて思い起こした。その時、この勅命にただ順うのみの道に踏み出したという思いが突き上げた。もう私にはこれしか頼むものはない。自分の能力も、知識も、経験も、一切捨てたのだ。ただ弥陀の促し、呼びかけにハイと応じて順うのみの者とならせてもらったのだ。お正信偈の後の念仏讃を、このような呼び声として感じたことは、これまでになかったことである。念仏讃の後は、ご和讃の繰り読みへと続く。さて今日はどういうご和讃であろうか。期待しつつ経本を

開くと、今日の繰り読みの箇所は仏智疑惑和讃の所だつた。

「自力の心をむねとして、不思議の仏智をたのまねば、胎宮たいくうにうまれて五百歳、
三宝の慈悲にはなれたり」

「仏智の不思議を疑惑して、罪福信じ善本を、修して浄土を願うをば、胎生たいしやうと
いうときたまう」

「仏智をうたがうつみふかし、この心おもいしるならば、くゆるころをむね
として、仏智の不思議をたのむべし」

「仏智の不思議をうたがう」ということは、本願の念仏一つに乘托（全身を任
せること）しきれないということである。本願の念仏と口では言いながら、生活
の全体を挙げてそれに依るということになっていない。そのような私のあり方
に対して、本日弥陀の大きな勅命が届いた。裸一貫でそれに順っていくしかない
身にさせていただいた。その有難さを思う。

その後の『御文』も期待して拝読させていただいた。今日の『御文』の繰り読
みの箇所は、五帖目第十五通であった。それは次のような蓮如上人のお手紙であ
る。

「それ、信心をとるといふは、ようもなく、ただもろもろの雑行雑修自力な
んどというわろき心をふりすてて、一心にふかく弥陀に帰するころのうたが
いなきを、真実信心とはもうすなり。かくのごとく一心にたのみ、一向にたの
む衆生を、かたじけなくも弥陀如来はよくしろしめして、この機を、光明をは
なちてひかりの中におさめおきましまして、極樂へ往生せしむべきなり。これ
を、念仏衆生を撰取したまうということなり。このうえには、たとい一期のあ
いだもうす念仏なりとも、仏恩報謝の念仏とこころうべきなり」

不思議なことに、今日の『御文』の繰り読み箇所も、ちょうど今日の私の踏
み出しのために呼びかけてくださっているようなお言葉ではないか。驚くとと
もに、有難かった。「雑行雑修自力のころを「ふりすてて」、弥陀を「一心に
たのみ、一向にたのため」もはやそれ以外にお前の生きる道はない。そういうふう
に深い願いをこめて一心に私に呼びかけてくださる。そういう如来のまことが、

は、私の目的は達せられない。辞めたら収入の道がない。でも机について考えたのでは結論はできません。お父さん、今日子供がかぶっていた帽子は、同行さんが下さったものです。はいていた靴は、東洋工業の社宅の奥さんが下さったものです。その子供さんが大きくなってはけなくなったのを、風呂で洗って屋根で乾かしたものです。失礼でなかったらはいて下さいと言われるので、喜んで貰いました。収支の計算では赤字になり、生活出来ない筈です。でも生かされております。親ですから心配して下さるのは有り難いですが、だまってみておして下さいませんか』

これはバス停まで送り出る道中の会話でした。学校を辞めて十一年後に父はこの世を去りました。

こうして揺れ動く中を今日まで来れましたのは、お師匠様が『道しるべ』としてお生活でもって、眼の前を歩いて下さったからです」

(『生まれてよかったですか』七十頁、七十一頁)

ここに大石先生は、「机について考えたのでは結論は出ません」と書いておられます。この時大石先生は、一体どういう世界を見ておられたのでしょうか。

「収支の計算では赤字になり、生活出来ない筈です。でも生かされております」このようにお父さんには語っておられます。

今私の生きている事実は、どれ一つをとっても、私の計算をはるかに超えた大きな働きの世界の中にあります。それは机について考えたのでは決して届かない、身の事実の世界です。その世界に帰ること。そこに私の生きる方向があります。そういうことを、私は大石先生のこのお言葉から教えていただきます。大石先生は六光学苑に入苑された時、人生の最大の岐路に立たれました。そして教職を辞められた時も、それに続く人生の大きな岐路でした。もしも大石先生が定年まで教職を続けておられたら、今日の私はなかったのです。それを考えると、大石先生のご苦勞は、私にとっては単なる個人的なご苦勞ではないのです。

でも大石先生が教職を捨てて、そのような世界に生きようと踏み出すことができたのは、藤解先生が説明を超えて、ご本願の世界を生きて見せてくださったからです。

「こうして揺れ動く中を今日まで来れましたのは、お師匠様が『道しべ』としてお生活でもって、眼の前を歩いて下さったからです」 こう大石先生は書いておられます。

私も同じ思いです。大石先生の歩みに導かれつつ、未知の世界をこれから歩象せていただこうと思います。

■この「心光寺からの便り」を書いている最中、大石先生から書信第八十八信が届きました。師は、このようなのつびきならない出来事の中でも、自由に、軽やかに、生きて見せてくださいます。随所に無碍（一切のものが障りとならないこと）の光を感じさせてくださいます。

■この書信の中に、次のようなお言葉がありました。

「病院への往復の際も、診察を待つ時間も、診察中も、お念仏を忘れることはありません。裏を申せば、仏様はつねに私の心を照らしてくださっているということです」

また、こういうお言葉もありました。

「私は今、仏様の本願名号を離れたら、一步も身動きができません」

また、先日（平成十五年十二月五日）私に下さったお手紙では、

「動乱の中に、動乱の中にこそ、寂滅がある。聖人様の仰せは真実であります」

というお言葉で結んでくださっていました。

私のこれからの行く手にはどのような出来事が待っているかわかりません。

一寸先は闇の中を生きる身ですから。でも、それだからこそ、念仏なくしては生きられないことをいよいよ感じさせられます。念仏とは、私を矜哀（まこと）の心で悲しみいっくしむこととしてやまない如来の、私に対する深い呼びかけです。

一切が空言、戯言の世の中で、この如来の呼びかけの念仏一つをいただいていることの喜びを感じます。如来の呼びかけの念仏のみが真実です。この如来の呼びかけに命をかけて応えていかれたのが、大石先生であり、また親鸞聖人であると思っています。願わくは私も残された人生をそのように生きたいと切に念じています。

南無阿弥陀仏

宮岳文隆拜

平成十五年十二月十一日

撰取山心光寺